

<研究報告>

老いの彼方へ
——札幌市内のファミリー・クリニックに
集う女性たちの老いの様式¹——

Coping with the aging process: Lifestyles of elderly women engaged
in voluntary works at a family clinic in Sapporo City

道信 良子（札幌医科大学）
Ryoko MICHINOBU (Sapporo Medical University)

要旨

札幌市内のファミリー・クリニックを拠点に地域活動を行っている高齢女性のグループ活動を事例に「老いを生きる」様式について論じる。研究方法にはグループ・ナラティブを用いた。女性たちの老いの様式について、現在の生/生活を支えるものに、「記憶」の働きがあるということが暫定的に導かれた。今後、老いと記憶に関する問題意識をもち、老いとは何かというテーマを検討することが必要である。

Abstract

In this paper, I explore the lifestyles of elderly women engaged in voluntary community works at a family clinic in Sapporo City. Through analysis based on a group narrative methodology, which is a major tool of health ethnography in my research, one pattern I was able to discern concerned the elderly's acts of remembering. Specifically, the active practice of remembering played a major role in the women's approach to aging. Further exploration of the role of memory in old age is necessary because it is an important aspect in understanding what it means to grow old.

Keywords : 老い (aging) 記憶 (memory) 孤独 (solitude) グループ・ナラティブ (group narrative) ヘルス・エスノグラフィ (health ethnography)

はじめに

2016年2月に行われた北海道生命倫理研究会（札幌医科大学）セミナーにおいて、札幌市内でひとり暮らしをしている高齢女性に行った個別インタビューに基づき、ひとり暮らしにおける「孤独の能動性」について仮説的に論じた。その論考は、インタビュー対象者に孤独感はありません、一般に論じられている独居高齢者の「孤独」というものがすべての高齢者にあてはまらず、その事実をふまえるならば、現代の日本社会で社会問題となっている高齢者の孤独をどのように説明すればよいのかという筆者の問題提起から発したものだ。筆者がインタビューを行ったのは70代の女性2人であり、配偶者を失ったさみしさはあるものの、子どもや孫などの家族、そして親しい友

人とのつながりを保って自立した生活を営んでいた。孫の面倒も、孫が中学にあがればやめる決心があるなど、そのつながりに依存性は感じられなかった。

本来、人は孤立する生き物ではない。配偶者が亡くなっても、家族や友人とのつながりを保つ。いまの日本社会における独居高齢者の孤独は、近代家族、近代個人の思考の枠組みのなかで動いている社会における孤独ではないだろうか。世界の民族をみると、配偶者がなくなったからといって孤独に生きるということはほとんどない。とくに伝統的社会ではそうである。日本の伝統文化も家族・親族の結びつきが強く、夫を亡くして残された妻たちが助け合って生きるという村落社会の制度・慣習が発達している。現在も、社会集団のなかから寡婦を排除するような社会福祉制度も家族観もない。それにもかかわらず、独居高齢者の孤独が社会問題として一般に認識され、それがひるがえって高齢者の自己認識に作用しているように思われる。すなわち、前回のセミナーでは、「独居という近代社会の概念による社会的現象と、孤独の能動性（自ら孤独を引き受けていく、孤独であるのだと思うことによって孤独が生まれる）によって、現代の独居老人が生まれる」（道信 2017）と論じた。

日本の伝統的な性別役割構造との関連における単身高齢者の生活や健康に関しては豊富な先行研究がある。そこでは女性は男性よりも社会性が高く、さまざまな縁をつむいで生きていく力があると論じられており、ジェンダーの視角に立つ実証研究も進められている（末盛 2017）。その一方で、「女性単身者は男性単身者に比べて高い低所得リスクを負い、低い経済的ウェルビーイングにある」とも論じられており（白波瀬 2005）、前回の調査結果は、恵まれた社会経済的地位にある女性に特徴的な現象と論じることでもある。しかしながら、わずかな事例にもとづいて、先行研究の知見を参照し、そう結論づける前に、高齢女性の暮らし、日々の思い、考えを実際の生活にねざして、よりていねいに調査する必要がある。

そこで、札幌市内のファミリー・クリニックを拠点に地域活動を行っている高齢女性のグループを対象に、2016年10月から現在まで、その活動の一部の参与観察を行った。2017年10月以降は「グループ・ナラティブ」という調査手法を加えて資料を集めた。このクリニックは個別インタビューを行った地域にあり、個別インタビューの参加者を紹介してもらった医療機関である。本日はこの調査の経過を報告し、「老いを生きる」とは何かという問いを立て、その様式に関する予備的考察を行った結果を報告する。

目的と方法

本報告の目的は、札幌市内のファミリー・クリニックを拠点に地域活動を行っている高齢女性のグループ活動を事例に「老いを生きる」様式について論じることである。研究方法には人類学の調査手法を用いた。すなわち、「老いを生きる」様式を知るには、老年にある人びとの暮らしに密着したエスノグラフィが有効である。エスノグラフィは異文化のフィールドで起こる現象を記述する人類学の研究手法である。本報告の資料はそれを保健・医療・福祉の領域に応用したヘルス・エスノグラフィ（道信 2012, 2016）という方法論を用いて得られたものである。ヘルス・エスノグラフィは、人類学における人間、文化、社会の探究を、ヘルス・サイエンスにおける身体、健康、医療の現象理解に応用し、人間の健康と幸福を追求するという目的を共有している。フィールドでは研究者の身体感覚を研ぎ澄ませて、文字や慣習として表現される文化の事象をあつめようとするのではなく、人間の生命がまわりの環境とのかかわりでどうなりたっているのかをつぶさに観察する。

具体的には札幌市内のファミリー・クリニックで月2回開店する簡易喫茶に月1回のペースで訪問し、喫茶閉店後に行われる反省会に出席し、その世話人となっている高齢女性8人を対象に

グループ・ナラティブを実施した。グループ・ナラティブはグループ・インタビューとナラティブを組み合わせた手法であり、日常生活のなかから談話のテーマを選び、それについて15分程語り合うというものである。これまでのテーマは、「朝起きて一番にすること」と「年末年始の過ごし方」であり、今後、家計、健康、ボランティアなどのテーマもとりあげる予定である。

グループ・ナラティブ参加者の個人背景

参加者 8 人は70代～80代前半で、配偶者がいる人も、一人暮らしの人もある。そのほとんどが、喫茶のほかに、月 1 回の食事会、クリニックが主催する子どもの病院探検や夏祭りの手伝いもしている。週 1 回のデイサービスに通うなど、福祉サービスを受けながら、地域のボランティア活動を行っている人もいる。8 人全員、札幌市内に住み、持家のある人もない人もおり、生活保護を受けている人もいる。このクリニックは、この地域の生活保護法による指定医療機関であることから、その縁でつながりをもっている人たちがいる。特定の政党を支持している人は、その機関紙を配布し、クリニックを拠点に仲間づくりを行っている²。

簡易喫茶と女性たちの役割

簡易喫茶の日には、クリニックの入り口に案内板がおかれている。喫茶は建物 2 階で行われている。階段をあがると、世話人の女性たちが青いエプロンをつけて、お茶や催しの準備をしている。客には100円でコーヒーとお茶菓子がふるまわれる。男性のテーブル、女性のテーブルとわかれて座ることの方が多い。客の 6、7 割は女性で、編み物、折り紙、ちぎり絵を行い、同じテーブルの人と会話して過ごす。男性は手芸には参加せず、ほとんどの人がコーヒーを飲んでしばらく会話して帰っていく。

世話人はちぎり絵や編み物の講師役も務めるが、訪問客をもてなすことが何より楽しいという。80歳前後の女性にとって、手仕事は若いころの生活手段であり、現在の趣味である。数人が集まるとその腕を披露し、完成した作品を壁面に飾り、あるいは身に着けたりするのも楽しい。それを互いにはめあうと幸せな気持ちになる。2018年の新年会では、これまで作成したちぎり絵が2階のホールの入り口の横に飾られた。四季によって異なる図柄の豊かさと、それぞれの作品を作ったときの記憶がよみがえり、全員が感動していた。

女性たちの老いの様式

これまでの調査から、女性たちの老いの様式について、次の 3 点が暫定的ではあると言える。と考える。

- ① 各自がいろいろな事情を抱えながらも、生き生きと生きている。
- ② 現在の生/生活を支えるものに、「記憶」の働きがある。
- ③ 老いの彼方で、過去が未来と交わっていくように生きている。

生活保護、母の介護、死別、長男の嫁としての役割、体調の不安、妹の貧困など、社会的、経済的な課題を抱えながらも、家族や友人、クリニックとともに活動を行う人たちからの支援を受け、また、同じような立場にある人を自らも支援しながら、女性たちは生きている。喫茶に参加できない日の理由には、家で介護している母の容態が悪化した、かぜをひいた家族の世話をするなかで自

分も高熱で倒れた、ひざの手術を受けた、現在住んでいるマンションの住人の集まりがあるなど、女性たちが抱えている日常の役割から生じるものが多い。つまり、喫茶に参加する・しないを自由に選択しているわけではない。家族や社会的にもたくさんの役割をもちながら生活している。

このような日常を支えているもののひとつに、遠い昔の自分の姿がある。女性のひとりには、もうすぐ80になる。生活保護を受けて市営住宅に住む。手芸が趣味で、ソックスを編んだり、ハロウィーンの制作や、干し柿に見立てた小物を手作りしたりしている。新年会などの集まりには、家でつけたという大根の漬物を配り、かぼんのなかには手作りの赤飯をしのばせて、その日であった友人や仲間に配ったりする。その日のために、コメも大根も大量に仕入れておく。この女性のアイデンティティの中心にあるのは、事あるごとに語る過去の暮らしぶりである。それは、母親の手作りのチュチュを身に着けてバレエ教室に通い、ダンス教室にも行かせてもらった話である。喫茶の訪問客が「お嬢様だったのね、わたしなんか百姓の娘だから、バレエなんて習ったことがない」とほほ笑むと、一緒に微笑んでいる。住まいは大通りのすぐそばだったという。

別の女性は、この地域の出身だ。かつてこの地域には「兵舎」がひしめき、クリニックの前身であった医療機関は厩（うまや）があった跡地に建てられた。昭和初期まで国内有数のリンゴ産地が広がり、リンゴ園を営む農家もいた。兵舎がたくさんあったころには歓楽街もあり、路地裏にはいまも何軒かスナックが残っている。この人の母親はクリニックの厨房で料理人として働き、退職後もここで暮らしている。この人自身は、20歳のときに東京に就職し、一緒に函館から出てきた友人と都内で暮らした。当時東京で頻発していた学生運動に参加して、なんとも言えない高揚感を味わった。東京で出会った東京出身の人と結婚して、子育てを終えてからはこの地域にもどり、今は夫婦で暮らしている。この女性にとって学生運動は若い頃の自分を象徴するものであり、その話になると終わらない。若者を相手に話すときは、今は社会を変えようという気骨のある若者がいないと不満をもらしている。

若い頃の記憶は、その当時の自分の存在をこえて、現在に共有され、今の自分をふるいたたせている。来訪客のなかにも、社会意識が高い人が多く、国際政治や日本の貧困問題の話でもりあがるテーブルもある。クリニックを拠点に協力的な人間関係をつくり、お互いに何かあったときには助け合うという同胞意識をもつ。これは、特定の政党を支持している人が複数いることとも関連している。実際に、仲間を市政に送り出している。なぜ地域活動やボランティア活動を生きがいのようにして生きているのか。そこには純粋な利他主義、社会主義では説明できないものがある。

それはたんに「過去を懐かしんでいる」という現象ではなく、老いという時間のなかに昔の自分がいて、老いの彼方で交わっていくかのである。反戦運動に参加した経験がないという女性も、姑の介護を長年つとめたというその経験が今の自分を支えている。昔は大変だったから、今が楽しい。これは記憶の作用が先の女性とは異なる形であり、苦労が幸せに転化している。今は決して昔と切り離されてあるのではなく、今は過去の出来事との循環のなかにある。人間のライフサイクルを直線的な思考のなかに位置づけてとらえていては、この女性たちが生きている豊かな人生観、老いの様式が見えてこない。老いという、生命がある限りにおいて終わりのない時間に、昔の自分、過去の時間が投影されている。過去の時間が老いの彼方で交わっていく。

老いと記憶

記憶は、人間の生命活動の一部であり、個人の身体に生じる現象でありながら、その表象は集団に共有されうるものである。そうでなければ人間は社会活動を営むことができない。過去の記憶がいまの自分をささえ、さらには未来にも投影されているという状況のなかで、老いと記憶との関係を、たんに医学的・保健学的見地から論じるのではなく、ひろく、文化の事象として理解する

必要があるように考える。

バレエもダンスもしていたという女性は、その話になると生き生きし、漬物や赤飯をふるまい、手作りのソックスもおしげなくみんなに配るが、いざ、今の住まいや経済状況にふれるような話題になると暗い顔になる。長年医療関係の助手をしていたが、いまの生活は苦しい。この女性が現実を直視していないというわけではない。バレエとダンスという高い文化的価値を帯びた記憶が、もうそのころの身体・存在はなくなっている、いまここにあるということである。そうした記憶に積極的な意味をつけて「老い」ととらえるアプローチも今後研究に必要なのではないかと考える。

さらに、老いと記憶については、物忘れや認知症の観点からの研究が先行しているが、記憶はその真実性や健全さのみで判断するのではなく、現在の生との関係でその不全も肯定的に受け止められるような周囲のまなざしが必要なのではないかと考える。このような問題意識をもって、今後グループ・ナラティブを進め、老いとは何かというテーマを検討していきたい。

本稿は、文部科学省科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C、「北海道における高齢者の孤立化に関する発展的研究」、課題番号16K04075（研究代表者：船木祝、研究分担者：山本武志、宮嶋俊一、道信良子、栗田剛）の研究成果の一部である。

参考文献

- 小池高史：高齢者の孤立は男性問題か？（特集 高齢者の孤立を考える）、エイジングアンドヘルス 26(2)：22-25, 2017
- 白波瀬佐和子：高齢期をひとりで暮らすということ——これからの社会保障制度をさぐる（特集 家族形成の変容と社会保障）、季刊社会保障研究 41(2), 111-121, 2005
- 末盛 慶：単身高齢者の精神的健康—ジェンダーの視点による検討、社会保障研究 2(1)：32-44, 2017
- 道信良子：島の子どものウェルビーイング、発達心理学研究 28(4)：202-209, 2017a
- 道信良子：看護研究におけるヘルス・エスノグラフィ—看護の実践への展望、文化看護学会誌 9(1)：10-14, 2017b
- 道信良子：健康と医療の人類学、看護研究 49(7)：552-556, 2016
- 道信良子：ヘルス・エスノグラフィ——子どものフォトボイスを事例として、第16回作業科学セミナー特別講演 作業科学研究 6(1)：15-19, 2012
- 道信良子：高齢女性のひとり暮らし、北海道生命倫理研究会第9回セミナー 2017年2月 札幌医科大学

注釈

- 1 本報告は、北海道生命倫理研究会第11回セミナー 2018年1月27日（土）札幌医科大学において報告した原稿をまとめたものである。
- 2 老いと政治活動については稿をあらためて論じることとする。